

＜帝国＞とは何か

崎 山 政 毅

本日はありがとうございます。「＜帝国＞とは何か」というテーマで、本日のコメンテーターを務められる酒井さんたちが訳されているアントニオ・ネグリとマイケル・ハートの著書『帝国』をめぐる話をさせていただきます。

さて「帝国」の話に入る前に資本主義に関する歴史観を現在の研究の到達点から見ていきたいと思います。その際、私がまず思い起こすのはポーランドのSF作家というのは狭い規定ですが、現代作家の一人で、優れた作品を書いているスタニスワフ・レムの短編を思い起こします。『完全なる真空』という国書刊行会から出されている短編ですが、自分が生まれたことの存在的な必然性を明らかにしようとする男が、なぜ自分が生まれたのか。必然性は父親と母親が出会ったからだ。なぜ父親と母親が出会ったのかと必然性をどんどん遡っていくと、ますます偶然の中に迷い込んでいって結局、必然なんてことは言えないという短編です。笑って読ませる短編かも知れませんが、資本主義の発生を考えてみると笑ってすまずことができない問題を含んでいるように思います。レムの短編というよりレムから連想したプロト資本主義の問題です。資本主義を考えた際、西ヨーロッパで形成され、世界的に展開していった資本主義の問題を考えざるをえないわけですが、今現在わかっていること、は西ヨーロッパだけではなくさまざまな地域に萌芽的な資本主義ができあがるような状況が存在したということです。しかしそれが「偶然を準備する必然」とでも言いましょうか、「歴史的に準備された偶然」の中においてヨーロッパのヘゲモニーへと転化されていったと言えるでしょう。

何らかの必然性のもとに資本主義が展開し、帝国主義が現れ、現在の意味で「帝国」（本日の「帝国」とはオスマン帝国とか中華帝国のかつて存在し

たさまざまな形態ではありません）、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートによれば現在における「最高の主権形態」となるわけですが、そのあり方を、単に「必然」が準備するというような寒々しい歴史観の中ではなく、どのように我々が生きている中に「偶然」をチャンスとして掴むのかという問題を含めて考えていくことのものを『帝国』は成しているのではないかと思います。

ただここで言いたいのは、プロト資本主義の「同時多発性」、また歴史的に準備された偶然の中からヨーロッパのヘゲモニーが生まれてくるということがあっても、また、1492年、コロンブスの新大陸への到達を仮に近代の出発点だとしても、ウォーラーステインが言っているように「1492年からずっとグローバリゼーションが続いている」という話には決してならないだろうということです。そのような大雑把なグローバリゼーションの連続説は、資本主義という運動のもつダイナミズムを覆い隠してしまうでしょう。確実に段階区分が必要な所以です。

さて、ネグリとハートの『帝国』という論争的な本の中で、まず提起されているのは、これまで「帝国主義論」という形で語られてきた内容が、すでに古いのだという「決めつけ」です。悪い意味ではなく肯定的な意味での決めつけですが、これまで帝国主義論が持っていた、あたかも聖書のようにレーニンの『帝国主義論』を読むという不毛な態度から、新たな読みの中で、どのような次の一步を記すことができるのかということを、まずは考えてみなければいけないと思います。別の言葉で言うと「帝国主義論のactuality」になります。ネグリとハートたちがやっているレーニンの『帝国主義論』のactualityの見つけ方というのはレーニンの論考を「政治的に読む」ことにあります。本日の話のために、久しぶりにレーニンの『帝国主義論』を繙いてみたところ、

その奥行きのある方に素直に驚いてしまったんですが、レーニンは「帝国主義とは何か」という定義をこのように述べています。

「帝国主義とは資本主義の独占段階を示している」。それを指し示す5つの基本的なメルクマールがあります。1, 生産と資本との集積が、経済政策で決定的役割を果たす独占を作りだすほどの高い発展段階に達したこと。2, 銀行資本と産業資本が融合し、この「金融資本」を基礎にして金融寡頭制がつくりだされたこと。3, 商品の輸出と区別される資本の輸出がとくに重要な意義を獲得していること。4, 資本家の国際的独占団体が形成され、世界が分割されていること。5, 資本主義的最強国による地球の領土的分割が完了していること。まとめると「帝国主義とは、独占体と金融資本との支配が形成されて、資本の輸出が顕著な意義を獲得し、国際トラストによる世界の分割が始まり、最強の資本主義諸国による地球の全領土の分割が完了した、そうした発展段階の資本主義である」という規定です。

レーニンが見ていた帝国主義はヨーロッパ諸列強を中心とした帝国主義でありました。だからこそ「古い」という言い方で簡単に切ってしまうのではなく、これを歴史的な文脈の中でどういうふうに今読み込んでいくのかということが問題になるわけです。そしてまた、レーニンの『帝国主義論』の中ですでにグローバルな条件が書かれている点にも注目をしておきたいと思います。ただし『帝国主義論』は資本の矛盾に分析が集中されており、他民族支配の形態として植民地問題も抱えているにもかかわらず、植民地諸国、従属国、半従属国における人々、民衆、人民の問題はほとんど書かれていないという点を指摘しておかなければなりません。また、アメリカ合衆国の歴史家キャロル・グラックがアントニオ・グラムシに言及しつつ述べたように、20世紀においては歴史的な文脈をふまえた記述が空間論的の修辭を用いるようになったという転回のありかたからすると、レーニンの分析は地政学的に分割された世界のありようを取り上げてはいるものの、空間論的な深まりに欠けているところがあることも述べておく必要があるでしょう。

さてアントニオ・ネグリとマイケル・ハートがレ

ーニンの『帝国主義論』をどのように読んでいっているかという点に移ります。

「レーニンの『帝国主義論』による独創性は主体的立場からの帝国主義批判にある。したがってそれは、危機の革命的な潜在可能性に対するマルクス概念につながっている。彼はわたしたちに道具箱を与えたのだ。それは反帝国主義的な主体性の産出のための機械である」。

これがネグリとハートの立場、切り込み方です。その上で彼らが重視するのは、レーニンの『帝国主義論』を支えるレーニンの思考の中で、主体のありかた、つまり「革命の主人公たち」がいかに内在的な力の中に登場しうることかということがポイントであったということです。マルクス主義をどのように定義できるかという問題（立場によって様々に定義がされ、それぞれの正統性の主張が繰り返しコンフリクトを起こしてきたことをご存知でしょう）が残るにせよ、これはマルクス主義の議論の一番の枢要点であったわけです。

レーニンの『帝国主義論』は第1次大戦の最中に書かれました。そこで一番の焦点になるのは、帝国主義の世界戦争が実際に起こっている状況に対して、どのように批判的に切り込むのかという問題です。私も久しぶりに読んで、つい有事法制が国会で決まってしまうかもしれない現在の日本の状況を考え直したのですが、レーニンの時代にあってもきわめて突飛に思えただろうことを言っている。それは「革命的祖国敗北主義」です。戦争に行って殺したり、殺されたりする必要はない、とまで言ってしまった。それをなし逃げるあり方、「労働者、農民たち、我々を殺し合いの最前線に送るような支配の関係を根底から転覆する」ということが、乱暴に言ってしまうと『帝国主義論』の政治的な到達点になるわけです。そこでは「戦争」と「帝国主義という形で設定されている資本の膨脹」や交易が同じ次元で考えられている。その点がネグリとハートの切り込み方とつながるところだと思います。

「社会的交通」という概念を介して、同じ次元において戦争と植民地支配、ある民族による他の民族の支配に基づく資本主義的関係の動態に焦点を当てながら、帝国主義の問題がとらえられている。「運

動としての資本主義」のあり方を確実にとらえ、それに対する闘い方、闘う登場人物、主人公である革命的な主体もまた「運動」として考えられている。それらが「交通」というキーコンセプトをもとにした主体的な革命論の提起として、レーニンの中に結晶化されていると考えることができるでしょう。

ただし、繰り返しになりますが、レーニンの分析はヨーロッパの諸列強による植民地の分割に焦点が当てられたものです。しかし、第1次大戦の後には支配的ヘゲモニーを有する強大な国家として登場してきたのはアメリカ合衆国でありましたし、現在もまたそうであるわけです。

とはいえ、現在のアメリカ合衆国の存在様態を「アメリカ帝国主義」と規定して、国民国家論的な束縛の中で現在の状況をとらえるのではなく、ネグリとハートたちは現段階の世界権力をグローバルに展開している資本の問題として考え、その中で主権論的な問題構成として「帝国」を立てています。その背景として存在しているのはグローバルに展開している資本による全惑星的な社会（市民社会ももちろん含まれます）の「包摂」です。すべてが資本の運動に包摂されていると彼らは考えているのですが、そうした状況が内在的に、彼らが現在における変革の主体としてとらえている「マルチチュード」（多様性をうしなわない人々の集団的な存在）、革命的な決定的な主体の登場につながっていくわけです。

『帝国』では、最終的に「マルチチュード」の提起にいきつくのですが、ここでは一足飛びに「マルチチュード」の説明と称揚をもって「結論」、というわけにはいきません。本日の講演会では「<帝国>とは何か」とタイトルをつけており、私自身は歴史研究に関わっていることもありますので、一応「帝国」をめぐる研究、私の立場から見る学問的な配置について触れておきたいと思います。

「帝国」史研究は「大英帝国」の研究をはじめとして、多くのすぐれた蓄積がなされています。日本においても近代日本史研究の中で「帝国」史研究がようやく根を張りつつあります。これまでの国民国家的な問題構成では、まず日本を中心において、その周辺に植民地朝鮮、植民地台湾、「満洲」を配置

するという構図になっていました。しかしながら日本の「帝国」の歴史的編成をきちんととらえようとするならば、日本を中心に置いてそこからそれぞれの植民地との「距離」や関係を測定するというやり方は、きわめて戦後のな限界を有するものです。というのは、次のような理由からです。戦後において、とりわけ70年前後を転換点として、侵略戦争、植民地支配に対する批判的な観点が形成されるにいたったのは当然と言えるでしょう。しかし、そのような批判意識と同時に、その中でつくられてしまったある種のパラダイムの中で日本の「帝国」の歴史がとらえられるようになってしまいました。それは問題や矛盾をすべて、当時は「内地」と呼ばれた日本本国に還元してしまうような考え方です。「中心」である「内地」によって操作・計算・管理されてしまうような「周辺」としての植民地、という問題設定と言い換えることもできるでしょう。

しかしこの間、そのパラダイムへの生産的な批判、つまり、さまざまな植民地の配置も含めた広域圏として帝国日本をとらえ、複合的な構造物としてそれを分析していこうとする作業がはじまっています。ただこれを「日本帝国」、「大英帝国」と「帝国」ごとに分けてしまうと、一国主義的国民国家論から見た「帝国」批判を主観的には超えようとして、「国民国家」を「帝国」というカテゴリーに置き換えた一国主義的な落とし穴にはまってしまう。そうではなく、諸帝国の動態とそれらの間の角逐において、歴史を考えていく必要があるでしょう。

たとえばアメリカ合衆国を参照項にしてみましょう。アメリカが1898年の米西戦争の後にアジアにおける初の植民地として領有したのはフィリピンでした。これによってアメリカは西欧に遅れながらも「帝国」として自己形成していくわけです。ところが、フィリピンは、たんにアメリカの植民地であっただけではありません。すでに台湾を植民地化していた日本帝国が膨張していく時の南側の「最前線」でもあり、東南アジアにおける英仏蘭植民地との相互関係におかれ、「南洋群島」と呼ばれた南太平洋の島々との歴史的な関係をもつていたのです。複数の支配の力が交錯するような空間であったわけです。そういう配置の中から一「帝国」史ではなく、

そこに存在した諸関係を見直していこうという動きが出ていることは、積極的に評価しなければならないと思います。

あるいは東京外国語大学の名誉教授の山之内靖さんたちの共同研究の中心的な考え方である「システムとしての総力戦体制」の問題についても同様です。「総力戦体制」も、これまでは国民国家的な問題設定のなかに位置づけられてきましたし、そのような考えは現在も強い傾向を保っています。しかし、国民国家的な枠組みに還元しえない「帝国」的編成がありうるだろうと思います。なぜならば、国民国家が「外部」に敷延されて、つまり国民国家が膨脹して「帝国」になったのだと考えることはできないからです。十分にはたされていない戦後補償の中心的な問題でもある旧植民地出身者の処遇につながる政治的な諸権利のあり方が、日本帝国の「内地」と「外地」では決定的に異なっており、その違いが植民地帝国・日本の法空間をつくりあげていたこと一つをとっても、そのことは理解できるのではないのでしょうか。繰り返しになりますが、さまざまな「帝国」のせめぎあいの中で、日本帝国のあり方を含めた歴史的な諸問題を考えていくことは、大切な課題だろうと思います。ただしこうした帝国史の議論は理論的な設定にとどまるものではなく、当然のことながら、実証的な研究を中心になされなければなりません。

ここで本筋に戻ろうと思いますが、今まで述べてきた帝国史にかかわる問題設定の展開が、ネグリとハートが『帝国』を執筆する基底をなす諸条件が準備されるなかで可能になってきたのではないかと、私は考えています。

ところで、先程のレーニン帝国主義論から『帝国』への橋渡し、とりわけ「マルチチュード」への架橋のために、潜在的な革命主体の問題をめぐって、ここで一旦「マルクスの理論の提示へ」へと道筋を変えなければならないでしょう。

まず古典的な形のマルクスの理論、それにはいわゆる「正統派マルクス主義」も入りますが、そこでのプロレタリアートをめぐる考え方を祖述しておこうと思います。これまでの主流のパラダイムでは、まず中核的な産業労働者群が形成され、その周辺に

「相対的過剰人口」が形成されるという、「中心」「周辺」の単線的な展開が見えるわけです。しかし、ネグリたちの考え方はそのような「組織的労働者中心主義」ではありません。近代における政治統治、政治哲学は一体何だったのか、という問いを契機として、彼らの考えをおしはかってみましょう。

『構成的権力』という大部の本の中でアントニオ・ネグリは次のように言っています。これは「マルチチュードへの恐れとしての近代性」と題されている部分からの引用です。「近代の政治哲学は行政から生まれるのではなくて、恐れから生まれる。その合理性はその抑圧的な様相においてのみ秩序化の道具であるにすぎない。不安が道具的理性の原因であり、抑圧はその結果なのである。したがって近代はマルチチュードが主体性として自己表現するためのあらゆる可能性を否定するものである」。

この間話題のワールドカップでのフーリガン対策はわかりやすい現れですが、「マルチチュード」として登場してくる「何者か把握しきれず、それゆえに管理や制御が不可能な社会的存在」、つまり恐怖をもたらす「余所者」に対する可能性を徹底的に潰していこうということが近代の政治哲学なのだというわけです。ネグリは「これが我々の言う近代性の第1の定義である」と断言します。そうした管理し支配する権力に「構成的権力」が対置されます。この「構成的権力」とは、主体性の領域において自ら価値を見だし増殖させていく、それと同時に社会的なプロセスとして価値が増殖していく、運動としての主体の謂いです。自分たちで自分たちの未来をきちっと掴むことができるだけではなく、自分たちもまた歴史の中の主体として生きていくあり方を「構成的権力」という言い方でネグリは立てているわけです。それは別の言い方をすれば「マルチチュード」にほかなりません。さらにネグリの言葉を聞いてみましょう。

「それにいかなる場所をも与えられていないということは不思議でも何でもない。それは当然予期しうることである。構成的権力が姿を表す時、それはいつでもある異例の、特別なこれまでなかったような現象に還元されてしまう。またそれらが必然的なものとして認められる時には、外部性として（余

所者だからあいつらは揉め事を起こすんだ」「余所者だからあいつら病氣持ちなんだ」「余所者だから」という言い方ですね)規定されることになる。さらにそれがあらゆるタブー、あらゆる排除、あらゆる抑圧形態に打ち勝つ時、それは何らかのテルミドールによって無力化されなければならない。構成された権力はこうした否認、否定にはかならないのだ。

彼の提起は「恐怖をもたらす周辺への視点をきちっと立てるべきだ」というふうに私には聞こえます。それは「現在のな」ということだけではなく、19世紀の最後の4半分に確立された世界市場の問題と連ねて言うならば、移民というかたちで登場した人々の越境、まさしく「賤民」としてのプロレタリアート、近代的な意味でのプロレタリアートではなく、良知力さんが『青きドナウの乱痴気』(平凡社ライブラリーから刊行されています)で書かれたような「移動して、入りこんできた民」、ルイシュ・ヴァリエが『労働階級と危険な階級』で「生物学的ドラマ」と呼んだ、あちらこちらから都市へと流れ込んできた「有象無象」の人々です。ネグリの提起を踏まえて、人々の越境・移動・流入という途轍もないエネルギーを秘めた社会的過程をとらえているのは、ヤン・ムーリエ＝ブータンの分析です。彼はアントニオ・ネグリをフランスへ呼んだ優れた経済史家であると同時に社会活動家でもあり、マルクス主義の理論家としても面白い仕事をしている人なのですが、ここで引用するのは彼が書いた『思想』別冊「トレーシーズ」の第2号に載った「あらゆる壁の敵意と敵意の壁との間」という面白い論文の中の一節です。

「プロレタリア化に関する伝統的理論(これまでの主流であったスタティックで単線的な歴史理論のことです)は、従属的労働には賃労働制の萌芽を一切認めない一方で、前資本主義体制における小土地所有者の独立性あるいは主体性を過大評価する傾向がある。また、いったん資本制が確立されるや、プロレタリアートの対抗力を完全に消去し、あらゆる半プロレタリア形態の出現を封建制の遺物と捉えてしまう。つまりプロレタリア的ならざる「半面」に主体性があるなどとは思ってもよらないわけである。そのためこの自称「階級」分析は、近代化と工業化

を平板に追認することと差がなくなってしまう。要するにこの分析は、労働者階級の資本主義への同化、統合の分析にすぎず、プロレタリアート、労働者階級、生きた労働が、彼らの主体的次元において、資本の進化と分節にも決定力を及ぼすという相互作用を再構成したりはしないのである」。

ヤン・ムーリエ＝ブータンの指摘は正しいと私は思います。近代政治哲学がもっとも恐れを抱いた存在であり、近代統治の「源泉」となったのは、マルクスの有名な『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』で描かれているような、流れこんできて、さまざまな形で生きるチャンスを得ようとする「セミプロレタリアート」、移民の存在であったわけです。

こうした人々の移動運動の方から資本主義の歴史を把え直すと、移民の存在を抜きに考えることができない現在の世界のあり方につきあたるはずです。そしてそれは確実に『帝国』の問題設定に隣接するものです。いくつか事例を挙げてみましょう。今、アメリカの領土の中に組み込まれているプエルトリコの人々が最も多く生きているのはどこか?それはニューヨーク・シティです。世界で2番目にメキシコ人が多く住んでいるところはどこか?ロス・アンジェルスです。これらの事実が示すのは、移動の現在の「結果」でしょう。それは近年に起こったことではなく、すでに1世紀近い流れができあがっている。

これまでのように国民国家的な編成で問題を考えてしまうと「中心」にいる「良民」に限定された物の見方に陥ってしまいます。つまり「定住者であり、市民＝国民として生きている側」からの問題設定に閉じこもってしまう。しかし我々は、実に多くの「市民＝国民ではない人々」がさまざまにすぐ近くに生きていることを知っています。日本の入管当局が出している公的なデータにおいても30人に一人が日本のナショナリティを持っていない。彼らは言葉どおりの我々が隣人なのです。そして彼らを抜きには日本の歴史はわからないし、今現在の社会も成り立たないのです。しかしその人々は日本の入管体制・治安管理体制にとってみると統治の対象であり恐怖の源泉ですから、「どうやって入れないようにするか」という政策が反復され、コントロールや排除の

対象になっているわけです。しかしその人々は、我々それぞれの生にとって、不可欠な存在であるはずです。

その人々とのつながりの中から現在の日本を見ていく、世界を見ていくことを考えるとすると、移動する民の問題設定の方から見ていくことが大切になるのではなかろうかと思います。ここでネグリとハートの『帝国』の問題に接続するという点においては何が論じられなければいけないかと言いますと、植民地において、第三世界において継続する「本源的蓄積」の問題です。それはローザ・ルクセンブルグの『資本蓄積論』における提起であり、ネグリとハートが依拠している決定的な論点です。ローザ・ルクセンブルグは資本主義を次のようにとらえます。

「資本主義は世界を併呑し、他のすべての経済形態を踏み潰す傾向をもつ、他の経済形態の併存を許さないという普及力を伴った、最初の経済形態である。だが同時にそれは、単独ではその環境およびその培養土としての他の経済形態なしには実存しえない最初の形態でもある。すなわちそれは、世界形態たろうとする傾向をもつと同時に、その内部的不可能性のゆえに生産の世界形態たりえない最初の形態でもある。それはそれ自身における一個の生きた歴史的矛盾であり、その蓄積運動は矛盾の表現、矛盾の絶えざる解決であると同時に悪化である」。

「本源的蓄積」は、マルクスの『資本論』においては西ヨーロッパにおける一回性の問題として立てられているものが、ローザの『資本蓄積論』においては植民地という場において継続して続いていると考えられています。これは第2次大戦後のラテンアメリカにおいて起こってきた「新従属論」においても維持された論点でもありました。この場合にローザが見ているのは資本主義の膨張の時間的な「先」にある、膨張の対象であるような「外部」です。しかし「外部」はそのようなものなのでしょうか。

これはネグリとハートの設定自体にもかかわることですが、『帝国』の最初の部分に、「第一世界の中に第三世界があり、第三世界の中に第一世界がある」という空間論的な相互嵌入が述べられています。これは突然生じた現象ではなく、あたかも複雑な入れ

子細工のように世界が構成されてきたのはたしかに事実だと思います。視点をずらせば、ローザの時代においては可視的に思われた「外部」は実際にはどのようなものだったのか、そしてその「外部」は現在どうなっているのか、という問題だと言い換えてもよいでしょう。

ローザが考えたような「外部」は、世界市場に結合した後のラテンアメリカにおける資本主義形成、国民国家の確立という点においては「二重社会」「複合社会」という形でとらえられていました。これはペルーのような地域では、資本主義化された都市の海岸部に対して、先住民農民の非資本主義的・封建的な関係が根強く残存しているアンデス山脈の高原地帯という二分法です。「資本主義化された海岸部、都市としての海岸部」と「非資本主義的な取り残された先住民が生きている山岳地帯」という二分法です。ずっとそういうものだと言われてきましたし、私自身、ラテンアメリカの研究を始めた時には「二重社会」を事実と思い込んでいたのですが、この間の実証的な研究も含めて、それは社会にかんする表象の問題であったということがだんだんとはっきりしてきています。

「二重社会」と言うためには、相互に分割された別々の社会空間が存在していなければなりません。ではそのような空間のみごとな分割が存在したのか。「二重社会」論がペルーに登場してきたのは19世紀末です。しかし人々の歴史的な動きを調べると、次のような歴史的事実がわかります。山岳地帯から先住民や貧しい混血の人々が都市部へ出てきて、また山岳地帯に帰る。都市部から山岳地帯へ白人や混血の人々が出掛けていってまた海岸部に入る。この二つの焦点をもつ運動は別々バラバラのものではありませんでした。粗雑な幾何学的修辭を用いれば、二焦点を持つ楕円運動が重層的に形成される歴史過程の中にペルーの社会もまた存在してきたわけです。これだけでもローザが考えた「外部」が、少なくとも資本主義との連関においては「純粋な外部」ではなかったことがわかります。そして、この「外部」は、現在のペルーにおいては、圧倒的な多数を占める都市大衆、「チョロ」と呼ばれる人々として存在しています。

「チョロ」という呼び名は、かつてはアンデス高地の文化から根こそぎにされた先住民や貧しい混血層を指す侮蔑的な言い方だったのですが、現在では都市大衆のアイデンティティにも転化し、肯定的にも用いられるようになっていきます。さて、この「チョロ」たちが登場してきたのはどういう経過なのか。とりわけグローバルな資本の運動との関係で言うなら第2次世界大戦前夜からの動きにそれが表われています。

人口動態から、何が起ったのかを見てみましょう。1940年の時点でペルーの総人口は約600万人でした。それが1961年には約1,000万人、約というのは都市部に流れ込んできた人々をきちんと定住民として人口センサスの対象にできないからです。あくまで推計です。40年で600万人、1961年には1,000万人、1981年には約1,700万人、1990年代後半に出された政府の統計によると2,300万人。半世紀で4倍に増えているわけです。増えただけでなく注目すべきは人口分布の変化、人口の配置の変化です。山岳地帯の農村から海岸部の大都市地域への大規模な人口移動が起こっています。1940年には全人口の3分の1が都市の人口でした。都市の人口の2倍が農村部に住んでいた。それが首都圏、リマを中心に集中が顕著で、61年には約200万人だったのが1981年には500万人、現在では700~750万人の間。総人口の3分の1が首都リマを軸とした都市部に集中しています。

こういう極端な人口集中の中で、都市機能の整備は追いついていません。都市へ流入してきた貧しい人々は専ら土地の不法占拠という運動、闘いによってチャンスを掴み、そこに「バリアード」という居住区を形成します。バリアードは植民地都市であるリマを取り巻くような形でますます増殖しています。都市周辺部に見捨てられてきた不毛な大地を占めており、正規に安定した雇用に決して吸収されることのないバリアードに住んでいる貧しい人々が街頭で物売りをしているわけです。植民地都市のリマの中へ、中へと流れ込んできている。ある社会学者はこの事態を「民衆の洪水」「民衆の氾濫」と呼んでいます。人々はかつてのように農村部の文化に本質主義的にくっついていてのではなく、根こそぎにされて都市にやってくる。かつてだったら自分たちの

出身地で互いに集団をつくりあって互いに競い合い、ときには憎しみあっていたものが、1960年前後からは都市空間の中で新しい関係性を築き上げつつあります。そしてこの人々が支持をしない限り、ペルーの政権は完全に揺らいでしまうほどのプレゼンスをもっています。このことは国内的な地域間の移動ではありますが、ペルー資本主義の一つの特質、ペルーという特殊な国の特殊な資本主義ではなく、グローバリゼーションの中で出てきている「帝国」としての現れ方の問題につながっているだろうと思います。

『帝国』に戻りましょう。ネグリとハートはローザが述べた「外部」をどう見ていこうとしているか(いうまでもなくこのことはレーニンの場合と同様にローザの読み換え・読み直しです)。彼らは「内部と外部との間に引かれたさまざまな境界線を反復して動いているような動き方の中での配置」、つまり一つの運動として考えようとしている。これまでのマルクス派・マルクスの問題設定を変換して、現在に切り込むための「道具箱」として読みながら、実践的な仮説を立てようとしているわけです。

その際にどういう話を考えるか。「主権」という問題にからめて言うと、設定された境界の中において固定された領土、そこに定住している住民たちという近代における「主権概念」に閉じられた領域の内側の話だけではなく、境界を超えて溢れだしてしまっただけで新しい空間を「内部化」していくような運動として資本を考え、その資本の流れ、運動に乗かってさまざまな境界を超えて動いていく力をとらえようとするわけです。このときの力とは、変革の主体のことです。物理的、地理的な境界だけではなく、政治的、社会的、文化的、歴史的な境界も超えて資本の運動と共に動いてしまっている、ある種、資本の支配の中に内在する「異物」であるような人々の問題として考えようとしているわけです。

固定された領土とその中に定住している住民という空間だけではなく、それが外に対して溢れかえってしまう、外から内部に向かって溢れこんでくるような膨脹と、引っ繰り返って「内部」になっていくという不斷の行き来のあり方、「脱領土化」と「再領土化」というドゥルーズ＝ガタリの言葉を用いな

がら、その両者の往還が述べられています。これは運動として把握することによって、資本自体に内在している特質をとらえようという試みです。資本という関係の運動に内在している、したがって労働の問題でもあるような両面は、「主体の問題として考えるならば労働の問題になる。支配の問題として考えるならば資本の分析になる」のですが、『帝国』ではその態様を「資本の運動それ自体に内在する、労働それ自体に内在する現代の「帝国」的な本性、本質の探究が必要なのだ」として考えようというわけです。

『経済学批判要綱』中でマルクスが述べている「資本に基づく生産の一条件は絶えず拡大される流通権益の生産であって、それがその範囲の直接的拡大であろうと、同一の範囲内でのより多くの生産量の創出であろうと資本はかまわない」というテーゼ、つまり問題なのはその運動のあり方であって、どこに、という話ではないとする考え方をテコとして、かつて「膨張」ととらえられた運動を再解釈し、すべてのものが内部化されるような状況の必然性を「資本は初発的から世界権力なのだ。真の世界権力への傾向性を帯びている」という点にみてとっているといえるでしょう。

その際に、これまでのマルクス主義では良くも悪くも破壊的な威力を持つ言葉として提示されてきた「資本の文明化作用」についての論議が、批判的地理学研究やグローバリゼーション研究で知られるデイヴィッド・ハーヴェイやマイク・デイヴィスの仕事をもとに空間論として置き換えられています。そしてネグリとハートは、これまでのマルクス主義における「帝国主義論」を「帝国」への経路をつくっていると肯定的に評価した上で、しかし「それはすでに古い。今の状況に我々は新しく政治的な介入の読みを進めていかなければならないのだ」と言うわけです。古い、と彼らが指摘している点は、もちろん不十分な探究の結果であって、それは「これまでのマルクス主義的帝国主義論は評価するところがあるにせよ、不均等発展と、そこでの潜在的な地理的な差異の意味を過小評価してきたのだ」という批判に表現されているでしょう。

この指摘を歴史的に生起してきた問題で考えるな

らば、非資本主義的に資本主義を取り巻いていると考えられた「外部」の領域が資本制のあり方に接続され、変換されてきたということをきちっと見ようという話をしているわけです。それは「本源的蓄積」と言われたもののある種のrevisionであるわけですが、それを「資本化」という「危ない」用語を使いながら「身体」という問題に照準をあわせて、ネグリとハートはこのように言っています。「すべてが資本の膨脹する身体へ有機的に統合されてきているのだという現実があるのだ」。

彼らは、これまで過小評価されてきた空間の配置にきちっと目を向け、しかしそれを単に反転させるのではなく、冷厳に現在進行中の問題を見ていると私には思われます。その姿勢が端的に表われているのは、「資本による包摂」をめぐる分析の部分でしょう。「資本のもとへの労働の形式的な包摂」（これは賃労働関係に組み込まれるが、しかしまだ完全な支配状況に入っていないというあり方です）、つまり「セミプロレタリアート」と呼ばれる人々や不熟練・未熟練の労働者として扱われてきた労働者の存在にもかかわる局面ですが、それから労働者が資本の完全な共犯者となっていく実質的な包摂への転換、つまり「外部」から「内部」への移行がとらえかえされ、「残酷で無慈悲な歴史的なプロセスに、資本の文明化作用はどこでも同じように暴力的に襲いかかる」という「類似性のモデル」に即してできあがった、「外部」とこれまで見なされた差異にかかわる支配の様態として、同時にその裏面としての主体性として位置づけ直される。

運動の問題としては、さまざまな存在の違いを飲み込んでいく資本の「身体」を、「外部」に置かれたものを内部に転換させてしまう、内部の配置へ移し換えていくような「内部化される外部」として見ているわけです。それは非資本主義的な外側を囲んでいるさまざまな環境、領土であり社会の形であり、さまざまな文化、生産のプロセスだったり、労働の形であったりするわけですが、それらのさまざまな違いが資本の身体の中における有機的な器官として結合されてしまう、つまり「包摂」されると見ている。そしてそのとき「内在的なものにされているがゆえに決定的に中における絶対的な外に変わってし

まうような力」もまた同時に形成されてきているのだというわけです。

言葉を換えると「資本による包摂」という支配の進展が皮肉にも資本に対抗する内在的かつ主体的な力をもたらす、資本自体は思いもよらず自分の中に危機を抱え込んでどんどん増殖させてしまっている、ということであり、「包摂がもたらす転覆の可能性」が指し示されている。そういう問題がアントニオ・ネグリとマイケル・ハートの『帝国』において「マルチチュード」（「マルチテュード」）という設定に行き着くわけです。ところで「マルチチュード」ですが、「この言葉はスピノザの概念を使った」とネグリとハートは言っています。しかしスピノザ自身の哲学にその淵源を探そうとすると、「マルチチュード」はネグリたちがいうような絶対的に肯定的な意味では用いられていません。法外なほど乱暴な「読み」と言えるかもしれません。マルクスもスピノザも「道具」として使うという立場に加えて、彼らのスピノザ評価が「内在性の哲学者」（これは正しいと思います）、差異と変化を何よりも重視し、singularである存在様態をはっきりと把握した思想家というものですから、訓詁学的な批判は不毛でしょう。

さて、彼らは現在の「帝国」をどのように定義しているのでしょうか。ミシェル・フーコーの言葉を援用（実際には転用ですが）しつつ、彼らはこう述べています。「生政治的な世界の共同体の中における流通やコミュニケーションや言葉の手段の総体であり、強制権、支配のあり方の手段と武器の総体でもある」。常に両義性に満ちているということです。完全に支配から自由な存在が、今・ここに存在しているわけではない。支配の進展の中で、グローバリゼーションという世界的な運動が、支配の運動であると同時に、支配を転覆させる可能性を「内部」における「絶対的外部」、すなわち「マルチチュード」という主体として準備してきている。しかしそのままではこの「絶対的外部」は潜在的なものにとどまるかもしれません。それをどのように現実化するかという点では、インターネットをはじめグローバリゼーションがコミュニケーション領域で生みだしてきた新しい主体と生産のかたちにネグリとハートは

注目していると思います。その点において「非物質的労働」という概念をここでは強調しておきたいと思います。

「非物質的労働」というのは、資本による労働支配の問題であると同時に、主体にまつわる「関係形成労働」の現在的な規定です。とくに主体の側においては、たとえば「知的所有権」がそうですが、知そのものが所有の対象として「商品」として流通する一方、旧来の私的所有の問題圏では片づかない、共有・分有（リナックスのようなフリーウェア・ソフトに表現されている人々の中での知恵と工夫の分かち合いが好例でしょう）が現れている。支配にかかわる主体がこの惑星をネット状に覆ってしまっていると同時に、支配の束縛を超える個々人が集合性を備えるという個的かつ集合的な主体も登場してきているということです。

繰り返しになりますが、ネグリとハートがグローバリゼーションという一つの運動に見て取っているのは、一方では支配であり、操作であり、計算であり、嵌入の可能性です。他方ではそこからの離脱であり、自由であり、自分たちで自分たちのあり方を決めていく、自分たちも歴史のプロセスの中に埋め込まれ生きていく存在であることを見いだしていくことが不断に続く可能性です。それは、「できそこないのヨーロッパ」であるイタリアに生まれたアントニオ・ネグリという人の具体的な経験に裏打ちされているでしょうし、ネグリたちの考え方は日本に直輸入することはできないだけに、どのように我々がそれを武器に代えていくのかという問題にもなるわけです。

さて、知的所有、支配のためのアイディアという問題を考えると、今や空気や水を含めた環境も「商品」となっていることに目を向けざるをえません。ここでおさえおかねばならないのは、環境それ自体が即自的に商品なのではなく、環境を商品として取扱うというアイディアが物質化されているという事態です。その点では、非物質的労働の現在的な支配つまり「帝国」の中で、それに立ち向かい抵抗する人々の存在を指し示している事例があります。それはアジア太平洋資料センターというNGOが出している雑誌『月刊オルタ』に載った記事で、

パブロ・ソロンというボリビアの市民運動活動家の報告です。これまでボリビアでは上水道工事、水道を政府機関が公営で分けてきた。ボリビアの先住民であるアイマラ、ケチャラ、グアラニーという人々にとってみると、水は「母なる大地に流れる血」であって、それを自らが生かし、暮らしていくのはあたりまえであり、上水道公社はその暮らしを支える公企業だったわけです。ところが、IMF、国際通貨基金と世界銀行の圧力のもとで提案された「水を商品化したらボリビア国家が抱えている借金を棒引きにしてやる」という「誘惑」にボリビアの支配層が負けて、上水道公社を解体し水の使用权・利用権をアグアス・デル・ツナリ・ベクテル社という多国籍資本傘下の一企業に譲渡する契約を結んだわけです。それに抗して水源に近いコチャバンバという都市にさまざまな人々が集まって、4日間、コチャバンバ市を占拠し、その契約を白紙に戻させたのです。

私はこの闘いは、WTOに対するシアトルやジェノバでの反対運動とほとんど同質の抵抗運動・対抗運動だと考えています。ネグリたちの概念を使えば、それらの運動は「マルチチュード」的なものであったでしょう。様々な場所で様々な人々が関わっている運動が、根っこでつながっているのです。その根をさらに張り巡らせるようにする試み、つまりごく普通で多様な人々がコチャバンバ市を占拠し自治をおこなった4日間から見えてくる可能性を破壊させないためのつながりを、我々もまた日本でも考えることはできるだろうと思います。

最後に政治学者の藤原帰一さんが『帝国』を経済

還元論だと「いちゃもん」をつけておられますが、そうした非建設的な「批判」が『帝国』に対して出される可能性は否定できません。かりに「理論的な欠落」をあげつらうとすれば、その一例として「自由貿易帝国主義論」に関する論議がないという指摘をすることもできる。アメリカ合衆国は9月11日の事態があろうとなかろうと、米州自由貿易帝国主義をつくって一人勝ちの状態を経済的に継続し、アメリカ両大陸やカリブ地域の諸国に押しつけてきたんですね。さらに、モノとカネの移動における自由（つまり支配の自由をもとにした貿易）はよいけれど、ヒトの移動の自由（つまり移民）はもうたくさんということで、人々の移動をコントロールできるようにしていこうという政策を今進めているわけです。そういう点では自由貿易帝国主義をめぐる論議をしないといけないという問題をどのように『帝国』をめぐる論議を豊かにするものとして考えていけるかが問われています。サッカーの比喻でいえば、敵に点を入れられたらいけない。どうやって蹴られた球を受け止めてパスできるか。あるいはパスは出来なくとも、少なくとも敵に点をとらせないよう応援を送るサポーターになるような形の運動を積み上げていくのが大切なと思います。

本日はさまざまな論争を呼んでいるアントニオ・ネグリとマイケル・ハートの著書『帝国』をめぐる、その中から得られるものを我々が考え共有していくための入り口として、いくつかの問題について話をさせていただきました。ご静聴ありがとうございました。